

赤野井湾在来魚復活事業調査

片岡 佳孝・太田 滋規・亀甲 武志・桑村 邦彦

1. 目的

赤野井湾は、かつてニゴロブナ・ホンモロコ等の在来魚の優良な産卵場であり、漁場であった。しかし現状では、外来魚が多数生息し、在来魚の漁獲は激減している。滋賀県は赤野井湾における在来魚の復活を目指し、外来魚(オオクチバス・ブルーギル)の集中駆除とニゴロブナ・ホンモロコの種苗放流を組み合わせた事業を本年度から行っている。水産試験場は、その効果調査を行った。

2. 方法

(1)種苗放流

守山市赤野井地区の水田においてニゴロブナ・ホンモロコ種苗を育成し、中干し時に流下させた(ニゴロブナ 16 面、51,584 m²、ホンモロコ 26 面、64,480 m²)。水田放養日はホンモロコが 5/20、21、22、ニゴロブナが 5/30、31 であった。6/16、17、19、20 に一部の水田を対象(ニゴロブナ 4 面、ホンモロコ 10 面)として流下尾数調査を行った。

(2)ビームトロール調査

放流後の動向を調べるためにビームトロール網(底引き網)を用いた採集調査を行った。赤野井湾内に 3 定点を設定し、8 回(6/3、6/11、6/18、6/25、7/2、7/8、7/16、7/23)行った。

(3)南湖エリ漁獲物調査

柳ヶ崎のエリの漁獲サンプルを対象として赤野井水田放流魚の確認を行った。

(4)北湖における沖曳網・刺し網漁獲物調査

2015 年 1 月から 3 月にかけて琵琶湖北湖の沖曳網(底引き網)によるサンプルを対象として赤野井水田放流魚の確認を行った。

(5)南湖における刺し網調査

2015 年 3 月～6 月にかけて南湖の刺し網漁獲サンプルを調べた。

3. 結果

(1)種苗放流

推定流下尾数は、ニゴロブナ 71.4 万尾、ホンモロコ 10.7 万尾であった。水田放養日から中干し流下日までの生残率はそれぞれ 34%と 5.3%であった。ホンモロコの生残率が低かった。

(2)ビームトロール調査

調査期間(のべ 24 回)を通じた総採集個体数は 3,370 尾であり、うちオオクチバスが 3,052 尾を占めた。フナ稚魚は 5 尾採集され、赤野井水田放流ニゴロブナは 4 尾であった。ホンモロコは採集されなかった。

(3)南湖エリ漁獲物調査

柳ヶ崎エリにおいて 2014 年 12 月 1 から 11 日の間に 76 尾のホンモロコが漁獲され 2 尾が赤野井水田放流魚であった。

(4)北湖における沖曳網・刺し網漁獲物調査

ホンモロコは、調査した 6,224 尾のうち 5 尾が赤野井水田放流魚と確認された。ニゴロブナは、2,449 尾のうち 4 個体が赤野井水田放流魚であった。

(5)南湖における刺し網調査

漁獲された、ホンモロコ 12 尾のうち赤野井水田放流魚は確認できなかった。

表 1 ビームトロールによ

り採集された魚種とその採集個体数と割合(%)

	採集個体数	割合(%)
フナ稚魚	6	0.2
ホンモロコ	0	0
スゴモロコ	13	0.3
チヌモロコ	0	0
モツゴ	85	2.3
ニゴイ	1	0
ピウヒガイ	70	1.9
カマツカ	3	0.1
ツチフキ	48	1.3
ゼゼラ	1	0
カネヒラ	9	0.2
タイリクバラタナゴ	0	0
ヨシノボリ	137	3.6
ウキゴリ	6	0.2
ヌマチチブ	11	0.3
ワカサギ	1	0
オオクチバス	3052	81
ブルーギル	250	6.6
スジエビ	63	1.7
テナガエビ	14	0.4
合計	3770	100